

小学校の特別支援学級担任が行う保護者支援

—進路選択に向けた保護者への相談支援—

学籍番号 239218
氏名 森 航海
主指導教員 平井 美幸
副指導教員 柿 慶子

第1章 緒言

日常的に行っている保護者の方との対話や、個人懇談、支援学級の保護者会などから中学校進学に向けた支援学級担任が行う保護者支援を明らかにすることによって、保護者支援の有効な実践が可能であり、支援在籍児童の中学校進学に対する悩みや不安を低減できると考える。

そこで、本実践課題研究は、さまざまな保護者との関わりがある中でとりわけ保護者との面談に着目し、支援学級担任が行っている保護者支援を明らかにすることを目的とする。このような実践知を明らかにすることで、中学校進学に向けた支援学級在籍児童に対する支援の参考資料となることを意義に推進した。

第2章 進路選択に向けた保護者への相談支援（1）

地元中学校進学を予定している児童が通常学級のみにするのか、支援学級を利用するのか、それとも通級教室を利用するのかの判断に悩んでいる A さんの保護者に対する支援過程を可視化し、それらの保護者支援を省察していくことを目的とした。

省察から保護者ニーズは中学校進学にあたって、情報が乏しいから正確な情報が欲しい。子どもがどういう状態で学校生活を送っているのか、成長できているのかが知りたい。同じ教具の人など相談できる相手が欲しい。の 3 つのニーズが見えてきた。また、ニーズを聞き出す際には保護者と支援者が話しやすい、安心して話ができる関係性が重要であることが分かった。

第3章 進路選択に向けた保護者への相談支援（2）

支援学校への進学を予定している児童の 6 年生の 1 年間の指向性への悩みや進学後の不

安を抱いている保護者に対する支援過程を可視化し、それらの保護者支援を省察していくことを目的とし推進した。

省察から保護者との面談など、保護者の思いに寄り添い続け、Bさんのためにできることを一緒に考え、支援し続けた結果、子どもの悩みや不安などが中心であった思いとともに、保護者自身の悩みを聞き出すことができた。また進学後の相談相手が欲しいや進学までに何をBさんに身に付けたらよいのかといったニーズが見えてきた。

このことから、保護者のニーズを聞き支援していくためにも、保護者の思いに寄り添い続け、学校としてできること、できないことを明確に伝えることや学校での子どもの様子を日々伝えていき、子どもの成長を可視化していく評価していく、評価支援の大切さが見えてきた。

第4章 成果及び課題

中学校への進学に向けて、小学校の特別支援学級担任の立場で保護者支援を実践した。その詳細をプロセスレコードに書き起こすことを通して、保護者支援を分析、考察した。これらの過程から、1つに信頼関係の構築、2つ目に正確な情報支援、3つ目に子どもの情報共有と評価、4つ目に保護者同士のつながりの機会を提供すること、といった4つの保護者支援の観点を見出した。4つの観点はいずれも関係し合うと考えられるも、とりわけ、1つ目の信頼関係の構築は不可欠と考えられた。

課題としては、今回の実践ではお二人の保護者との面談での結果であり、実践知としては数が少ない。保護者支援として一定の成果を得ることができたが、この実践は保護者支援のほんの一握りの実践に過ぎない。また、今回の対象を特別支援学級在籍の児童の保護者のみであり、中学校進学における保護者支援としては幅が狭いというのも課題である。保護者支援を継続して行なっていき、年代に応じた中学校進学における保護者支援を考えて行く必要がある。保護者の多様化が進んでいっているからこそ個に応じた保護者支援を考え続けて行かないといけない。

第5章 結論

中学進学における支援学級担任が行う保護者支援とは、保護者との関係性を大切にし、保護者から中学進学における保護者のニーズを明らかにすること。その上で、学校としてできること、支援学級担任としてできることを明確にし、保護者と向き合い面談を通じて支援を行い、その実践を省察することにより、支援在籍児童の中学校進学に対する悩みや不安を低減できる保護者支援の有効的な実践的知見を得ることができた。